●ワイド●

「自らを主人とすることなく、自らの主人になれ」という人間教育を目指す

「我々の世界」を生きる力が大切

桃山学院教育大学（大阪府堺市南区）は今年4月、開学した。

梶田叡一学長は人間的な成長・発達を実現するために、「本学は単に勉強だけでなく、主体的でしっかりした人間に育ち、他人の痛みや苦しみ、悲しみを理解し、人を支えることができるようになる、という人間教育を目指しています」と語る。

日本は1960年から高度経済成長期に入り、70年代には豊かな時代が到来したが、90年前後から社会のゆるみ・たるみが目立つようになった。

2000年に教育改革国民会議でゆとり教育からの脱却に踏み切り、2001年に大型の中央教育審議会が設立され、梶田氏は「幼稚園から大学まで〝自分を主人公とし、他人と協力し、共生社会を築く人間教育をしよう〟という方向に、日本の伝統に基づきつつ転換するという努力を続けています」と強調する。

同学発足にあたり、大阪の教育界との密接な連携を図るため、副学長に元大阪府教育長の中西正人氏を招聘し、梶田氏は「これまで中西正人先生とは色々な仕事をご一緒させていただき、先生の尊敬すべき人柄と識見で本学を導いていただきたい」と期待する。

グローバル化、情報化、少子高齢化時代を迎えた今、梶田氏は「時代の流れに対応する力を身に付けることが必要で、創造性や課題解決力、柔軟性など〝我々の世界〟を生きる力、が一層必要になります」と自分自身の人生を充実させ、生きることはどういうことか常に問い直していく〝我の世界〟が求められる。

桃山学院教育大学 梶田 叡一 学長

今年4月、開学

ゆとり教育からの脱却 日本の伝統に基づき転換

元大阪府教育長 中西正人氏を副学長に招聘

――今年4月、桃山学院教育大学が開学しました。今後のビジョンなどをお聞かせください。

梶田　新しい「志」を持って、私たちは桃山学院教育大学をスタートさせました。

現在、私立の4年制大学の3割は定員割れです。少子化の影響もあり、多くが大学運営の困難な事態になるでしょう。必ずしも有名大学に学生が集中しているわけではありません。これからの大学は新しい時代に対応した明確なビジョンを持つ教育が必要とされます。旧態依然の手法で運営してきた大学は運営が難しくなります。こうした中で危機感を持って、新しい形の大学創りをするところが増えれば、結果として受験生の大学への選択肢が広がることにもなります。

本学の卒業生全てが教師になるわけではありません。人間教育の理念を中心とした大学教育を受け、卒業後、教師の道を歩む学生もいるでしょうし、公務員や企業などに就職して世の中に貢献しようとする学生もいるでしょう。

本学は単に勉強だけでなく、主体的でしっかりした人間に育ち、他人の痛みや苦しみ、悲しみを理解し、人を支えることができるようになる、という人間教育を目指しています。

本学は人間教育に注力し、単なる理念だけでなく、どうすれば一人一人の学生に人間教育の成果が身につくのか、を工夫しています。

例えば、これまで挨拶できなかった学生がキャンパスで2カ月足らずで挨拶ができるようになりました。当大学では全ての先生と学生が講義前後に起立し、礼をします。そうすると、気持ちの持ち方が変わり、ケジメがつきます。

本学はキリスト教系の大学ですが、お釈迦さんの教えにもある「自らを主人とすることなく、自らの主人になれ」という言葉を大事にしています。これは自分自身を主人公にしてしまうと時に自分の気持ちのままに動いてしまい、自分を十分にコントロールできなくなることを意味しています。

人はTPOを中心とした「現実」をきちんと認識し、それに応じて自分自身をコントロールできるようにならなくてはなりませんし、また理想や志など「価値」の方向に向けて自分自身をコントロールできるようにならなくてはなりません。これが「自らの主人」となることなのです。

この2つの力を身に付けないと人間らしい人間にはなれません。武士道などが典型的ですが、日本社会では伝統的に自分をその場その場でコントロールすることを重んじてきました。本学では学生に〝この2つの自己コントロールができる人間になりなさい〟と教育しています。この2つの力を身に付けてはじめて、人間としての成長と言えるでしょう。これはキリスト教精神の根幹にも含まれているところです。

「ゆとり教育」の時代に、「好きな時に、好きなことを、好きなようにやるのが良い」と言われたりしていましたが、これは一番人間をダメにする方法です。江戸時代の儒学者・貝原益軒の「和俗童子訓（わぞくどうじくん）」にも、「子どもを勝手気ままにさせることを一種の愛情とはき違える姑息の愛では本人をダメにしてしまう」と書かれています。子どもを甘やかすことだけでは、人間的成長を図れないのです。

日本は敗戦後の荒廃から立ち直り、1960年からは高度経済成長期に入って、70年代には豊かな時代が到来しました。それから20年して、1990年前後から社会のゆるみ、たるみが目立つようになりました。

アメリカは日本より20年早く、70年頃から社会的ゆるみが増大し、日本の場合よりひどい「ゆとり教育」をやりました。アメリカは80年代には立ち直ったのですが、日本は90年代から「ゆとり教育」になりました。不登校生が増加し、自分をコントロールできない子どもや若者が激増しました。

日本は2000年に教育改革国民会議をやって「ゆとり教育」からの脱却に踏み切り、2001年には大型の中央教育審議会が設立され、幼稚園から大学まで〝自分を主人公とし、他人と協力し、共生社会を築く人間教育をしよう〟という方向に、日本の伝統に基づきつつ転換する努力を続けています。

大学は学校教育の仕上げの段階ですから、本学は一人一人の学生をサポートし、4年間で大きく成長することを期待しています。

――副学長に元大阪府教育長の中西正人氏を招聘しましたが。

梶田　当大学の発足にあたり、大阪の教育界との密接な連携を図りたいということからも、副学長に元大阪府教育長の中西正人氏を招聘しました。私自身、これまで中西正人先生とは色々な仕事を御一緒してきましたので、先生の尊敬すべき人柄と識見で本学を導いていただきたいと期待しています。

――今の日本の教育や教師に求められている資質についてどう思いますか。

梶田　昨今、ポピュリズムが政治の世界をはじめ、社会の各分野ではびこっています。しかし、教育は本質を見据え、実直に取り組んでいく仕事です。

本学は長期的に、しかも本質的に物事を捉える人間の育成を考えています。これからの教育や教師に不可欠な点です。本学の教育理念は、自分自身に与えられた生命を、自分の責任で生きていく人間を育てるという「人間教育」にあります。これは「我々の世界」を生きると同時に、その土台として「我の世界」を生きる力を養うことです。こうした視点に立つ教育のあり方、教師のあり方を求めていきたいと考えています。

――グローバル化、情報化、少子高齢化時代を迎えた今、どんな人間像を目指したいですか。

梶田　AIやIoTが発達すれば単純な仕事は減少するでしょう。時代の流れに対応する力を身に付けることが必要で、創造性や課題解決力、柔軟性など「我々の世界」を生きる力、が一層必要になります。そして、その土台として、生き方の問題も大切になります。自分自身の人生を充実させ、生きることはどういうことか常に問い直していく「我の世界」を生きる力です。

本学は、先にも触れましたように、「自らを主人とすることなく、自らの主人になれ」という人間教育を目指しているということを、ここで再度強調しておきたいと思います。

（岡田　哲弥）

創造性や課題解決力、柔軟性など時代の流れに対応する力が必要

梶田叡一（かじた・えいいち）**氏の略歴**

昭和39年3月京都大学文学部哲学科卒業。文学博士。大阪大学教授、京都大学学長、国立大学法人兵庫教育大学学長、環太平洋大学学長、奈良学園大学学長などを歴任。平成30年4月から桃山学院教育大学学長。この間、教育改革国民会議（総理大臣の諮問機関）企画委員、中央教育審議会副会長・教育制度分科会長・初等中等教育分科会長・教育課程部会長・教育養成部会長なども務める。

昭和16年4月3日生。島根県出身。

ここで変わる。
自分も、未来も。

社会は極めて速いテンポで変化しています。
子どもたちは、今の大人たちが経験している以上に、
多様な価値観の中でこれからの時代を生きることになります。
必要とされるのは、場の空気を読む力だけでなく、
自分の価値観を知り、そのうえで他者との対話を通じて協働できる力です。
これからの教育者もまた同じ力を持つことが求められます。
新たな価値観を身につけ、人としての豊かな感受性を持ち、
そして、社会の流れの中で学び続ける力をつける。
そのような学びが、桃山学院教育大学にはあります。

西日本唯一の「私立教育大学」。

St. Andrew's University of Education SEQUIMINI ME OSAKA
桃山学院教育大学
St. Andrew's University of Education

○教育学部／教育学科
［小学校教育コース／幼児保育コース／健康・スポーツ教育コース］

〒590-0114　大阪府堺市南区槇塚台4-5-1
TEL 072-288-6655(代)